対象となる功績内容

- 精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- 海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
- 家庭で実子に限らず多くの子どもを養育されている功績

その他の功績

原田　淑人

原田　淑人
（フィリピン　シキホール島「ビラマーマリン」リゾート代表）

フィリピン／神奈川県

ダーマンの愛称で親しまれている原田淑人（としと）さんは、フィリピンのシキホール島に住み、宿泊施設を運営しながら、島の子どもたちの教育環境を調える活動を2004年から行っている。この島にはインフラや学校教育など、多くの支援が必要で、現地にロータリークラブを新設することで、援助を受けられるようにした。同クラブを通じて日本をはじめ各国からの支援があり、島の100ある学校の半分以上にトイレを設置することが出来た。また、２つの村の4,000人の村人や７つの学校に、水タンクを設置し飲料水の確保を可能にした。さらに、幼稚園を４校、式事用の野外ステージを７校支援している。原田さんは、平塚市の小学校の元教員で、在職中から青少年赤十字のボランティアリーダーとして36年にわたり国際理解や奉仕活動を子どもたちと実践してきた。レバノン、クエート、オランダ等、海外で日本人学校の教員の経験もある。シキホール島の子どもたちに、鍵盤ハーモニカを寄贈し、これまで太鼓しかなかった島の楽器に、メロディーが加わった。また優秀だが家庭の貧困のために上の学校に進学できない子どもたちには、原田さんが運営するリゾート宿泊施設で働いてもらい、カレッジに進学させ、卒業後、海外で働けるように支援をしている。日本へも「技能実習生」として20人を送っている。援助や支援に頼りきりにならないように、現地でミラクルツリーと呼ばれ、栄養価の高い「モリンガ」の栽培を地元住民に促し、パウダー状にして販売。その売上を奨学金に充当している。

（推薦者：平塚湘南ロータリークラブ 会長 小沢　博）

この度は、大変栄誉ある賞を賜りまして、誠にありがとうございます。

私は小学校教員でした。教員時代、青少年赤十字と関わって子どもたちといろいろな活動をしてきました。今は「自分にできる何かを探しに」フィリピンのシキホール島でリゾートを経営しながら「島の子どもたちの教育の改善の活動」をしています。

100ある学校にトイレがない、水道施設がないのにびっくり。教え子たちの寄付でトイレ作りから支援をスタートしましたが時間がかかります。そこで友人を誘って「ロータリークラブ」を立ち上げました。それからは日本の多くのロータリークラブの支援があってほとんどの学校にトイレは設置できました。

いくつかの大学が私の活動を知って応援に来てくれました。青山学院大学の学生たちは「ソーランダンス」や「鍵盤ハーモニカ」を広めてくれ、コンテストを開きすごい盛り上がりを見せました。今でも山の中で私の車を見ると「ドッコイショ，ドッコイショ」の掛け声がかかります。国際基督教大学のミュージカルチーム「虹」は島中の学校を回り、子ども参加のミュージカル「オズの魔法使いなど」を披露してくれました。四国学院、横浜のフェリス女学院も学校を回って子どもたちと楽しくふれあってくれました。

黒板とチョークの授業ではない､楽しいことをやってくれる私が行くと「ダーマン、ダーマン」の愛称で迎えてくれます。島の子がダーマンを好きになり、日本人を好き

になり、日本が好きになってくれたらと願っています。

また優秀でも家庭の貧困で上の学校に行けない学生を毎年10人カレッジに送っています。彼らは小学校時代に私が学生やお客様と訪問して一緒に遊んだ子たちです。卒業したら海外で働ける支援をしています。今、日本でも「技能実習生」として20人が働いています。この学生たちを支援するために「命の木」「ミラクルツリー」と呼ばれる「モリンガ」を学校に島中に植えてもらいお茶にして日本で販売しています。

うれしいサプライズ‥昭恵会長が９月にセブ島に視察に来るとお聞きし「シキホール島は近いのでぜひ」とお誘いしたらシキホール島まで足を延ばしてくださいました。学校を訪問してくださり、紙飛行機を作って遊んだり、ジェンカを踊ったりして子どもたちと楽しく過ごしてくださいました。シキホール島の子どもたちにとって最高の１日になりました。

これを機会にさらに子どもたちの笑顔が広がるようにがんばっていきたいです。まずは水不足の学校に水を供給することからがんばりたいです。

▲ワーキングスチューデント
卒業したら海外で働くよう支援

▲ロータリークラブ支援の水タンク
５つの村と２つの学校に水を供給

▲鍵盤ハーモニカコンテスト

▲各学校にモリンガを植えてもらう

▲学生が鍵盤ハーモニカを教えて回る

ハンド＆ネイルケアボランティアチーム ガンチー

代　表
松本　知美

京都府

高齢者施設や障がい者施設などの福祉施設に＊福祉ネイリストらが訪問し、無償でハンド＆ネイルケアを施す活動を行っている。代表を務める松本知美さんと副代表の岩田亜希子さんはフルタイム勤務の傍ら、福祉ネイリストの資格を取得。地元のデイサービスを訪問しボランティアで施術すると、当事者の反応はもちろんのこと、その様子を見た家族や施設職員までもが喜び、福祉にかかわるすべての人の負担軽減やモチベーションアップ・維持に意義あることと感じ、2020年にチームとして活動することとした。2021年10月からは、京都府警察と、2022年11月からは京都市消防局と協働事業をスタート。高齢者の交通事故や特殊詐欺被害や火災や熱中症を防止する目的として署員と共に高齢者施設やサロンに出向き、署員の講話講習とともに「サギ注意・火の用心」等の特注ネイルシールを活用した安心安全の啓発広報活動にも継続的に取り組み、講話だけでなくネイル施術により、抑止力が長く続き、以降周囲の方とも、話すきっかけになると好評である。年々、体験人数は増え続け、2023年度は、年間1,500名に施術した。

＊福祉ネイリスト：高齢者や障がいを持つ方、病気を抱えた方にネイルケアを通して笑顔になってもらうことを目的とした認定制度

（推薦者：社会福祉法人 京都市中京区社会福祉協議会 事務局長 藪田　浩司）

こんにちは。ハンド＆ネイルケアボランティアチーム　ガンチー代表・松本　知美と申します。

この度の受賞により、私たちの活動をたくさんの方に知っていただくことができ、心から嬉しく思います。

2019年、初めて、現副代表である友人と高齢者施設にネイルボランティアに行きました。施術後の高齢者、施設職員、介護するご家族の反応に心が震え、ネイルが持つ魅力、笑顔にする力の大きさが想像以上で、とても驚きました。

「当事者のみならず、介護、福祉に関わるすべての方を笑顔にする力がある！この活動を広めていかなくてはいけない！」と勝手な使命感を覚え、友人と二人でこの団体を立ち上げました。

その後、すぐにコロナ禍が訪れ、当時は今思い出しても、大変なことばかりでした。ですが、これまでの人生で私を作り上げてきた経験で培った「なにくそ精神」が、より私を奮い立たせてくれました。あの時、あきらめなくて良かった！現在も施設訪問でたくさんの笑顔に出会う度に、そう感じています。

海外では、幼少期から無償の愛を他人に分けることに対して教育を受け、ボランティア、社会貢献、奉仕は当たり前のことですが、日本では、残念ながらそういった教育環境がなく、ボランティアをすることに対して「恥ずかしい」「偽善的」という風潮があります。

強要するわけではなく、それぞれがそれぞれに出来ることをする、ただそれだけの

ことです。ごみを拾う、困っている人に対して声をかけるなどどんな小さなこと、何でも良いと思うんです。もちろん､断られることや拒否されることもあります。でも、行動せずに後から「大丈夫だっただろうか」と後悔するより「困ってなかったんだ、良かった」と思えた方が幸せです。

私自身、これまで自分の思うまま自分が楽しいことに全力で取り組み、自由に生きてきました。そんな私が、まさかボランティアをすることになるとは思いもしませんでした。ですが、ボランティアをする前と後では全く異なり、生活に彩りが生まれました。ボランティアをする側なのに、自分自身が笑顔に、より幸せになりました。幸せを感じる力やアンテナが敏感になったのかもしれません。

大変なことや悲しいな、悔しい、ということもこの短い期間でもたくさんありました。ですが、今回、私たちの活動が社会には必要だと、認めていただけました。このような機会をいただき、心から嬉しくそして感謝の気持ちでいっぱいです。この度の受賞は、２人ではできなかったことも、同じ志を持つ仲間が１人、また１人と増え活動を広げることができた結果です。また、それを支援してくださった団体様、個人の皆様のおかげです。そして、当団体と関わってくださったすべての方のおかげです。

年を取ることは、ネガティブなことではありません。たとえ認知症になっても「誰もが年を取ることが楽しみになる社会」を目指して、微力ながら、尽力していきたいと思います。

♡ぜひ、私たちの活動を HP や各種 SNS などでご覧いただけると幸いです♡

▲デイサービスやすらぎ

▲みなさん恥ずかしいといいながらカラー選ばれます

▲市防災イベントで消防ブースで防災ネイルシール

チャイルドライン ハートコール・えひめ

運営委員
芥川　光江

愛媛県

2022年、日本の児童・小中高生の自殺者は過去最高の514人になった。子どもが大人に希望することは「話を最後まで聴いてくれること」「相談場所を増やして相談しやすくしてくれること」。チャイルドラインハートコール・えひめは2001年に設立され、そうした子どもたちの要望に応えている。全国統一フリーダイヤルと子ども電話「ひびき」の２回線で、５と０の付く日に全国からかかってくる子どもたちからの電話に24名のボランティアが対応をしている。これまでの着信数は56,000件以上。ボランティアは20～80代の主婦を中心とした女性が多く、12講座の講習を受けた後、事務所内で全国各地からの電話を受ける。昔は、逆上がりができた、賞を取ったなどの嬉しい報告を誰かに聴いてほしくてかけてくることが多かったが、現在は心療内科にかかり、薬を服用していたり、SNS に関する問題を抱えていたりする子どもが多い。子どもたちにとって、専門家への電話相談はハードルが高く「近所のおばちゃん・おじちゃんに話を聞いてもらいたい」という感覚でかけてくる。子どもが主体で、どんな気持ちも無条件に全て受け入れることを大切にしている。そして、子どもたちの声を社会に発信することも行っている。

（推薦者：一般社団法人 愛媛県摂食障害支援機構 代表 鈴木　こころ）

この度は、社会貢献者表彰という大変栄誉ある賞を賜りまして誠にありがとうございます。

私たちの活動は主に、子どもの声に耳を傾け、その心を受け止め寄り添う。理解を示す人がいることで、子どもは自分の力で歩んでいくことができる。そんな思いを基本においております。

現在40都道府県69の団体が、チャイルドラインを実施しており、私たち「ハートコール・えひめ」もその仲間です。

県内でも子どもを取りまく環境は厳しく、不登校や虐待は増え続け、子どもたちは身をもって SOS を発信しています。

そんな子どもたちからの声に耳を傾け、心の居場所づくりをサポートするため、私たちは民間で子ども電話「響」を設立し、23年子どもの声を聴いてきました。

子どものひみつを守り、活動するメンバーを守るためにボランティアは匿名です。

私たちは自分の子育てに反省したり、自身を社会に役立てたかったり、学びたかったり、子どもが好きだったり。自分が子どものころ話せなかったり、聴いて貰えなかった等、経験を持つ普通の大人です。

大人が子どもの話を、気持ちを聴く事は難しく、大人の価値観を押し付けそうになったり、評価しそうになります。定期的に継続研修や養成講座で学び、傾聴を思い出し、心を整えます。

いい時も、そうではない時も続けて来られたのは楽しかったから、この活動が好きだったからです。

子どもたちの声を社会へ届け、これまで多くの仲間や支援者の方たちと出会うことが出来ました。今回の授賞はそこで出会った方、お一人お一人の思いが積み重なり大きな形になったものと感謝しております。

静かな活動に光をあててくださりありがとうございます。

これからも子どもの声に寄り添い、安心して話ができる心の居場づくり、子どもから信頼される電話でありたいと願い、活動して行きたいと思います。

2008年(平成20年)6月11日 水曜日 生活(20)

まなぶ

「子どもの声 尊重して」

ハートコール・えひめ代表 染川さん講演

電話相談 性の問題が増加

▲2008年 愛媛新聞

▲2014年 福祉センターまつりのバザー風景

▲2022年 電話受け手養成講座

▲2014年 スタッフの交流会

▲2014年 湯山中学での講演会活動

一般社団法人 あんしん母と子の産婦人科連絡協議会

理事長
鮫島　浩二

埼玉県

さめじまボンディングクリニックの医院長、産婦人科医鮫島浩二医師夫妻が中心となって、全国の産婦人科医に声を掛け2013年に会が発足。特別養子縁組の法律が施行されたばかりの頃、予期せぬ妊娠に困っていた中学生と出会ったことをきっかけに、30年以上にわたり、生まれてくる子どもの幸せを第一に、予期せぬ妊娠をした女性の心のケアとその女性自らの選択を尊重し、特別養子縁組に取り組んでいる。「産婦人科医は、赤ちゃんに恵まれない夫婦と、望まない妊娠をして追い詰められた女性の狭間にいる。両者の間に立ち、生まれてくる命を守れるのは産婦人科医しかいない。これは使命だと考える」という鮫島医師の理念のもと、産婦人科医の立場から福祉と医療をつなぎ、子どもを育てられない母から、授かることが困難な家庭へ生まれてきた赤ちゃんを託す、3方にとって望ましい環境を作ることができる。予期せぬ妊娠をした女性は、誰にも相談できず孤立し、危険な自宅出産をしてしまい、最悪の場合事件になることがある。こうした悲劇を防ごうと現在、24の医療機関が協力・連携している。

（推薦者：こども SOS ほっかいどう 代表 坂本　志麻）

この度は名誉ある賞をいただき深く御礼申し上げます。

私は特別養子縁組制度が制定された1987年以来お産をやりながらこの支援に関わりをもってきました。私たち産婦人科医は、妊娠して困った方々と、望んでも妊娠しないで苦しんでいるご夫婦のはざまで仕事をしています。困っている双方をつなぎ活動してきましたが、さらに効果的に二つの命を守り、人生を再構築する道はないかと模索し、12年前から全国25の産婦人科施設で連携して妊娠中から生母の相談を受け、医療施設で見守りながら無事に出産したのち、赤ちゃんと共に過ごして熟慮していただき、どうしても自分で育てることがかなわなければ特別養子縁組をする仕組みを作りました。

生母に対しては産後のメンタルケアや避妊指導もしばらく必要です。また、中高生の妊娠相談や緊急避妊のためのピル処方を無料で行い、不幸な妊娠防止に努めています。

養父母選びは、里親認定を受けているのを最低条件に養父母養成講座、２回のご家族の面接、家庭訪問、外部委員の評価を受けて理事会で慎重に行っています。生母の退院の後、養父母に入院していただき、分娩室での誕生セレモニーから始まり育児指導を行い、退院後は自宅訪問して関わりを持ち続けます。縁組した子どもたちは150人を超え、家族同志お互いにラインでつながり情報交換をし合い、年に３回は集まったり Zoom 会議を開いたりして交流を深めています。

養子当事者たちも中高生～成人も増えてきました。思春期の彼らと定期的に Zoom 会議を開いて彼らの本音を聞き、成長を見守ってきました。ほとんどの養子たちは告知されて大事に育てられていることに幸せを感じて育ってきています。それでも思春

期になり、なぜ自分は実親に育ててもらえなかったのかという疑問やモヤモヤ感、生涯自分が背負っていく「養子」というレッテルに押しつぶされそうな重荷を感じることもたびたびあるようです。

養子当事者たちの支援が必要な時代がやって来たのを感じています。2024年夏クラウドファンディングに訴え、10人の養子当事者たちを養子縁組大国のアメリカに連れて行き、ユタ州のセントジョージで養子を育てている家庭にホームステイさせ、ブライスキャニオンなど大自然にも行き、世界の広さと自分の悩みの小ささとを体験させました。人の情けにも触れ、彼らの意識に大きな変化があったことを実感しました。皆様のお力もお借りして彼らの人生を好転させる支援をこれからも続けたいと思います。

▲2022年11月 あんさんセミナー（都内）

夕刊 読売新聞

20超の産科医療機関 連携

乳児虐待防止へ 108組成立

特別養子縁組 母子支え10年

相談多い10代 支援が課題に

縁組昨年3割減 3年連続減少

▲2013年 読売新聞

NPO 法人 つばめの会

理事長
山家　京子

東京都

摂食嚥下に問題がある、経管栄養を使用している、小食や偏食で成長発達に影響が出る摂食嚥下障がい児の保護者に向けて、情報交換の場の提供、受診可能な医療機関の紹介、医療従事者や社会への啓発活動を2011年から行っている。食べて飲み込むことは生来備わっている機能と思われがちだが、哺乳、離乳食、幼児食と段階を経て学習する機能であり、様々な消化器官が連携して行われる。その学習過程で疾患など何らかの理由で、一部や全てが正しく機能しない状態を摂食嚥下障がいと呼ぶ。代表を務める山家京子さんは、摂食嚥下障がいのある我が子のことを小児科医に何度も相談するも「赤ちゃんは吐くもの。体が大きくなれば吐かなくなる」「与え方が悪い」などと授乳方法や与えるときの表情の問題とされてしまい、不安で辛い日々を過ごし追い詰められた。その経験をブログに綴ると、反応があり同じ経験をしている人たちがいることがわかった。必死で食べさせることが虐待なのではないかと悩む人や食べることを嫌がる幼い我が子との関係が複雑化してしまう人、鼻から胃に通したチューブから栄養を入れる経管栄養がいつ外せるのか悩んでいる人もいる。小児科医にも摂食嚥下障がいのある子の存在が殆ど知られていなかったことや医療的な対処が確立されていないことを問題と感じ2011年から活動を開始。メーリングリストで会員同士の情報交換をはじめ、専門家から学ぶ勉強会や交流会の開催、医学会でのブース出展、医療や福祉関係者に向けのセミナーの実施に力を入れている。

（推薦者：弘中　祥司）

つばめの会は2011年に摂食嚥下障害児の親の会として設立されました。当初３名の親で設立した団体ですが、現在は入会者数が400名を超え、毎月一定数の入会希望者より連絡が入ります。主に情報を求めて検索して入会する会員が多く、家庭で対処するための情報は十分に行き届いていないといえます。

対象となる子どもは、経管栄養児、拒食（思春期痩せ症と考えられるものは対象外）、経管栄養依存症、極端な偏食少食がある乳幼児です。特定の疾患ではなく「飲食に困っている子どもの家族」という枠組みで活動してきました。

活動は主に２方向で、１つは患者家族にむけた活動、もう１つは医療者や支援職の方にむけた活動です。

患者家族に向けては、患者家族が摂食嚥下に困難のある子どものケアをするにあたり必要な情報をやり取りする場を作る活動を行っています。医療的ケアや持病により外出が難しい子どもも多いため、メーリングリストでの相談やオンラインのおしゃべり会を中心にピアサポートを行っています。

医療者や支援職に向けては、このような子どもの診察・支援をよりスムーズに実施していただくため、主に医学・歯学系の学会において啓発活動を行っています。これはこの症状の子どもの受診先が日本国内で少なすぎて保護者が困っているためです。この症状を相談できる医療施設を増やすことを目的として10年以上続けております。

当初は学会でも素通りされる患者団体でしたが、現在は情報を集める医療者の方が増えています。ついに令和６年には、医療者・支援者向けのセミナーを４回連続コースとして実施することができました。セミナー参加者からは長期的に継続した受講を希望する受講者が多く、令和７年度から新たな形で医療者・支援者が学び続けることが可能になるよう準備を進めています。

いずれの活動もスタッフのボランティアだけでなく啓発資金が必要で、特に啓発活動は資金がなければ実施が難しいのが現状です。全国の困った子どもの受診先を作るため重要ですが、そのためには医療者が学べる体制作りが重要となります。今回、表彰をいただいたおかげで来年度からの研究会の設立に向け、準備を進められるようになると考えています。手弁当で活動を続ける当会には非常にありがたく、将来の患者家族の未来へ大きく貢献できるきっかけとなります。活用できるよう引き続き努力いたします。改めてありがとうございました。

▲主催セミナーの調理実習

▲展示会

▲主催セミナースタッフ記念撮影

▲主催セミナーの様子

道村　静江

道村　静江
（かんじクラウド株式会社
取締役会長）

神奈川県

理科の教師を志していた道村静江さんは福井県立盲学校に配属され、２年後には横浜市立盲学校へ移り、通算28年盲学校に勤務した。当初、点字の知識が皆無だったことから猛勉強し、盲学校教員用に「点訳便利帳」を作った。これが全国の盲学校から評判を呼び、2002年に点字学習を支援する会を設立。やがてパソコンが普及し始め、視覚障がい者もパソコンを利用するようになったが、点字使用者は漢字を学習する機会がほとんどなく、漢字変換ができない盲学校の生徒のために『視覚障害者の漢字学習』（小学１年生～中学校編）を発行した。その後、道村さんは一般の小、中学校に異動となったが、視覚に障がいがなくても、漢字を覚えられない学習障がいや発達障がいのある子どもがいることを実感し、見て唱えて覚えるミチムラ式漢字学習法を考案し子どもの学力向上に貢献。退職後は、ミチムラ式漢字カードを製作、漢字指導の改善・普及に力を入れ、全国各地で年間60回講演活動を行っている。2018年に息子の友晴さんと創業したかんじクラウド株式会社では、2021年コロナ禍、ICT 教育が広がったことに合わせ、電子書籍「ミチムラ式漢字ｅブック」を発行した。音声や写真、アニメーションが網羅された「ミチムラ式漢字ｅブック」は、20校近くが採用している。海外在住の日本人児童へ継承語として漢字をいかに楽しく学んでもらうか、オンラインで指導するなど、子どもの漢字教育に尽力し続けている。

（推薦者：公益財団法人 共用品推進機構 業務部調査研究課 課長 金丸　淳子）

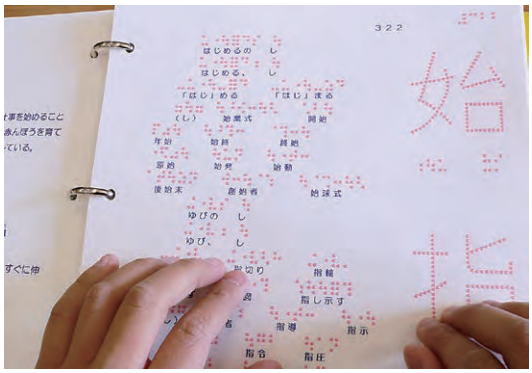
推薦者の方が、私が取り組んだ25年間の経緯を詳しく書いてくださっていますので、重複を避けて、私の思いの中にあることを綴ってみたいと思います。

大学卒業後、思ってもいなかった盲学校への赴任に内心驚き戸惑いました。中学校で理科教育を教えたかったのにと思いつつも、目の前には素直で学ぶ意欲満載のかわいい子どもたちがいました。全盲生に見たこともない触れない自然の様子やしくみをどう教えたらよいのか迷うことだらけで、私自身の経験や学んできた教育的手法は役に立たないことを突きつけられました。そこで、教師として教えるべきものを第一義に考えるよりも、彼らが何に困り、それをどう克服し、自立のために何の力を身に付ければ良いのかを考えることを優先しました。そして、彼らに合った学びの進め方を追求するようになっていきました。小学部の子を担当した時には、理科なんてどうでもいい。いつからだって学べる。しかし、学びのスタートには文字の習得が何よりも大事で、そこから言葉の世界を豊かにして、情報の受信・発信を身に付けることが必要です。だから、門外漢である点字を40年間・漢字を25年間、徹底的に研究しました。

つまり、弱者に寄り添った教育というのは、既成の知識や思考を教え込むのではなく、彼らに合った方法で、わかりやすく楽しみながらできる方法でなければいけない。そうして取り組んだ漢字の学び方は、従来のひたすら書いて覚える方法から脱却して、漢字のしくみを捉えて合理的に効率良く学べて、成り立ちから一字の示す意味を知り、言葉の使い方を広げていくなど、漢字の本質に迫るものになったと自負しています。

特に、発達障害や学習障害で従来の書く学習法が合わない子たちには、興味関心が持てる様々な入り口から学び始めればよいのです。過去に漢字学習がいやで身に付けられずにいた人も、漢字のおもしろさ・奥深さ・見事さを知りながら学び直すことができます。また、海外在住の日本語を学びたい人にも有効な学習法だと思います。

今回、社会的弱者の方たちに寄り添って活動している受賞者の皆さんの熱い思いやご苦労を垣間見て、互いに同じような思いや構想の中で動いているのを強く感じました。弱者の人に寄り添う活動をさらに広められたら、生きにくいと感じている人たちを勇気づけ、この社会を変えていくことにつながるのではないかと思いました。


▲視覚障害者の漢字学習（点字版）

▲盲児と一緒に漢字学習

▲なるほど！の漢字授業

▲友達と唱え合って覚える

▲職員研修（質問に答える）

▲タブレットを使った授業

下町グリーフサポート響和国

代　表
本郷　由美子

東京都

2001年に起きた大阪教育大学附属池田小児童殺傷事件で、当時小学校２年生の愛娘を亡くした本郷由美子さんは、事件の翌年、グリーフケアに出会い、心のケア活動を開始。さらに上智大学グリーフケア研究所でスピリチュアルケアの専門資格、スピリチュアケア師に認定されるなど、20数年に渡りグリーフケアの研鑽を重ねてきた。2018年に「下町グリーフサポート響和国」を設立し代表を務めている。団体名の“響和国”には「心が響き合い、人々がひとつになって支え合うような社会に」という願いがこめられている。グリーフケアライブラリー『ひこばえ』を設置するとともに、身近な人を亡くした人、事件や事故の被害者家族、被災した人、障がいのある人やその家族など、不安や生きづらさを抱えている人の多様なグリーフに寄り添う活動を行っている。グリーフを抱える人の中には「笑ってはいけない」と考える人も多く、活動の中では、安心して笑える場･涙を流せる場として、専門家の賛同を得て「落語」「紙芝居」「音楽と絵本」などを通して、癒やしの時間・空間を提供する活動も実践している。また団体運営スタッフのスキルアップ講座や研修にも積極的に取り組んでいる。多くの方にグリーフケアを体感してもらえるよう、これらの活動を無償で行なっている。

（推薦者：桑島　寛之）

この度「社会貢献者表彰」という大変名誉ある賞を全国のみならず、世界中で地道に活動されているみなさまと共に受賞させていただき、大変光栄に思います。私たちの活動をあたたかく見守り、支えてくださっている多くの方々とボランティアスタッフの皆様のおかげによる受賞です。心から感謝申し上げます。

私たちの活動は、誰もが経験すると言われる喪失による悲嘆をケアする「グリーフケア」の啓発活動と安心して安全に「かなしみ」を分かち合え、自分らしくありのままでいられる時間と空間を過ごせる居場所作りです。

活動を始めたきっかけは、自身が2001年に起きた大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件に巻き込まれ、深く多様なグリーフを抱えたからです。

2000年前後は、阪神淡路大震災が起き「心のケア」が社会に広がり始め、様々な立場の当事者による自助グループが活発に動き始めた時期でした。自身も犯罪被害者遺族当事者として「グリーフケアの必要性」を感じ、事件直後から学び、実践、啓発活動を開始しました。犯罪や災害の被害者だけではなく障害、生活困窮、虐待を受けている人、加害者と呼ばれる人、様々な立場の人たちと出会い、社会に中にある「多様なかなしみ」に触れ、『社会の中にある「様々なかなしみ」の声に耳を傾け寄り添いあえる社会は、今を生きる私たちにとって安全・安心・平安な社会につながる』との考えに至り、「恩送り」活動としてグリーフケアの活動を継続しています。

2016年､「東東京にグリーフケアの場を作ってほしい」という相談を受け東京都に「かなしみ（悲しみ・哀しみ・愛しみ）にこころを響かせあい、寄り添い合い、繋がりあ

える、和やかな社会になることを願い「下町グリーフサポート響和国」を設立しました。千差万別と言われる多様なグリーフに寄り添えるよう20数年の経験知を活かし、セルフグリーフケアの空間「グリーフケアライブラリー」の運営、「かなしみ」をゆるめる、解く、和らげられるようなグリーフケアのイベントを芸術や文化等に関わる専門家、行政の協力を得て開催、必要な方にお届けしています。

ささやかな空間と時間ですが、全国から多数の方がお越しくださっています。このような居場所が確かに求められていることを感じています。

人の和（繋がり）・環（お互い様の心）・話（気持ちを分つ）を大切に

受賞を励みとし、「グリーフケア」が当たり前に営まれる優しい社会の実現を目指し、一人でも多くの方にグリーフケアが行き届くように無償での「恩送り活動」を継続して行きたいと存じます。

▲グリーフケアライブラリー「ひこばえ」

▲区・市議会議員が「ひこばえ」来館

▲「ひこばえ」セルフケアの部屋

▲笑いとグリーフケア（落語）

▲スキルアップ研修（山谷めぐり）

▲音楽とグリーフケア（音楽と絵本輪読）

認定 NPO 法人 ミュージック・シェアリング

理事長
五嶋　みどり
©Timothy Greenfield-Sanders

東京都

10歳で渡米、11歳で楽壇デビュー以来40余年、第一線で演奏活躍を続けている世界屈指のヴァイオリニスト五嶋みどりさんが理事長を務めるNPO 法人ミュージック・シェアリングは、「あらゆる人々に本物の音楽を届ける」を理念に、30余年を経過した。中でも文化・芸術の振興と子どもたちの健全な情操教育のために５つの事業を行う。①訪問プログラムは五嶋さんをはじめ活動に協力するアーティストたちが学校や病院、福祉施設を訪れ、訪問先のニーズに合わせたコンサートを実施する。これまでに開催回数723回、参加施設数1,067にのぼる。②楽器指導支援プログラムでは、音大卒業生やプロの演奏家、音楽療法士などが特別支援学校に赴き、特性に応じた管弦打楽器の演奏指導を継続的に行い、合同演奏会、施設外でのイヴェント出演も行っている。③インターナショナル・コミュニティー・エンゲージメント・プログラム（ICEP）は、世界中からオーディションで選ばれた若手演奏家と自身でカルテットを結成し、アジアの開発途上国、日本で音楽を通じた国際交流、後継者指導を図る。訪問国は９力国、のべ12回を数える。④リスニング・プログラムは、コロナ禍で対面の活動を実施できなかったことから、五嶋さんがプロデュース、解説する、約20分（10巻）の動画を制作し無料配信を継続している。⑤Play ＆ Joy！（プレー・アンド・ジョイ）は、2023年から本格的にスタート。山間地や離島の僻地認定学校や地域に根付いた医療施設を定期的に訪問し、子どもたちに音楽体験を届けるプログラム。（1992年「みどり教育財団」として設立され、2002年に NPO 法人へ組織変更、「ミュージック・シェアリング」と改称した）

（推薦者：独立行政法人 国立病院機構米沢病院 院長 飛田　宗重）

公益財団法人社会貢献支援財団の社会貢献者表彰は、支援財団がその名の通り、社会のニーズに向き合い、奉仕精神のもとに自らの特性を継続して駆使するグループ、個人に授与されるもの。つまり、「功績の内容」にどれだけフィットし、その手法が如何に優れているかを見極められ、与えられるものと考えていた上の応募であっただけに、私たちの NPO ミュージック・シェアリングの受賞は思いもよらない事件であった。

弊財団も何れの NPO 団体に違わず、台所事情は厳しい。それに、生きる上で物理的に必要とされてはいないものを“如何にも”、と見せる技も知恵もない。そもそも、音楽で腹膨れることもなし。現代文化貢献者の末端であれ、世界のクラシック音楽界に名を刻もうかともするヴァイオリニスト五嶋みどりが、社会活動に見るものは何か。

彼女が20歳で立ち上げた Midori ＆ Friends（https://www.midoriandfriends.org）（米）、ミュージック・シェアリング（http://www.musicsharing.jp）（日）のスタッフ達が、常にプログラムの前進（クリエイティビティ）を試み、ファンド集めに躍起となり、五嶋に啓蒙された協力アーティストを励まし続けるのは、本物の音楽にのみがなし得る“孤独から解き放つ力”を目の当たりにしてきたからである。

今日も夜間学級へ、緩和ケア病院へ、特別支援学校へ、高齢者施設、時には矯正施

設へと自らを律し厳しい練習の積み重ねの上に磨いた音楽を運ぶミュージック・シェアリングの協力アーティスト達に、この度の受賞がどれほど意味あるものかは言うまでもない。

まことに有難うございました。そしてこれからもどうぞ宜しくご支援賜ります様、お願い申し上げます。感謝を込めて。

認定 NPO 法人 ミュージック・シェアリング

▲2024年 Play & Joy !

▲2013 年 ICEP ミャンマー ©S. Suzuki

▲2014年 訪問プログラム ©S. Suzuki

▲2017年楽器指導支援プログラム ©S. Suzuki

▲2019年 楽器指導支援プログラム 合同コンサート

▲2023年 訪問プログラム

社会福祉法人 ゆうかり

理事長
水流　源彦

鹿児島県

1967年に知的障がい者の支援施設として設立。利用者は共同で生活し、農作業や養豚などに従事している。家庭裁判所から非行のあった少年を一時的に預かり、生活指導などを行う補導委託先としての役目も30年程前から担っている。少年事件では処遇を決める際に、更生を視野にどうすることがその少年にとって最適なのかをひとりひとりに向き合って考える必要がある。預けられた少年は２週間から数か月の滞在期間中に、知的障がい者との共同作業や生活を通じて更生のきっかけをつかむ。ここで初めて「ありがとう」という言葉をかけられた青年もいる。施設の利用者は少年たちを「罪を犯した人」という見方をせず、人として接し、時に遠慮のない質問や言葉を投げかけてくる。そうした対応に、少年たちも感じること、考えることがあり、率直に自身を見つめ直すことができる。知的障がい者と罪を犯した少年たちは、互いに影響を与え合う。施設利用者には卒業がなく、その人生を終えるまで併走する。これまで施設での共同生活が主流だったが、今では出来ることは自分たちでと、それぞれのライフスタイルを尊重し、市内に14か所保有するグループホームで暮らす利用者の生活を見守っている。

（推薦者：更生保護法人 草牟田寮 理事長 深野木　信）

この度は、栄誉ある社会貢献者表彰を賜りまして、誠にありがとうございます。

当法人は、祖父が昭和42年にはじめた知的障害のある方を支援する施設を経営しております。令和４年に亡くなった父が家庭裁判所からの少年の受託（少年法第25条第２項第３号に係る補導委託の事業）を30年前からはじめており、わたしの代になってからはじめた保育園等でも受託しております。

引き受けてくれている当法人スタッフのおかげでいただいた賞ですが、何よりも亡き父の功績ということで今回は母と一緒に表彰式にお伺いいたしました。

令和６年のNHK朝の連続テレビ小説「虎に翼」の寅ちゃんのモデルである三淵嘉子さんが取り組んでこられたように、少年たちの笑顔を、障害のある方々や子どもたちが引き出してくれる気がして、そのつなぎ役をさせていただいております。

犯罪が複雑化、凶悪化してきている昨今、少年犯罪も例外ではありません。犯罪心理学の専門家ではありませんので勝手な推論ですが、罪を犯してしまう人に共通するのは自己肯定感の低さ、人を思いやる心の欠如、のような気がしています。もしかしたら、親御さんをはじめ、人から優しくされた経験や愛されていると実感することも少なかったのかもしれません。

彼らの周囲の大人たち、社会環境は、容赦ありません。非行少年と呼ばれてしまう彼らは、その大人たちや社会によって生み出されたのだと思います。その彼らに、私たちは、信じていい大人もいる、頼っていい社会がある、ということを伝えなければなりません。しかし、それは一朝一夕ではかないません。

知的障害のある方々の純真な笑顔。聞き取れないかもしれないけど何かを伝えよう

と発することば。それらを同じ空気を吸いながら、同じ釜の飯を食べながら、一緒に過ごしていくうちに、いつのまにか、じわじわと何かが染み入っていくのです。保育園の子どもたちからも同様に。

そうこうしているうちに、彼らの心の中のなにかが動く気がするのです。

受託期間が終わるころには、心なしか、彼らの表情が柔らかくなっているように感じます。受託機関としては、その後、彼らと連絡を取ることはできないのですが、過去には、利用者のみなさんと約束したから、と地域の運動会に顔を出してくれた少年や、最近では、クリスマスプレゼントとしてお菓子を届けてくれた少年もいます。

優しい気持ちをつなげていくこと、笑顔をひろげていくこと、これからもつづけてまいります。

「あなたの笑顔はみんなを HAPPY にする！」

▲市役所にも飾られるゆうかり学園の門松

▲ゆうかり保育園のスタッフとゆうかり学園の門松

▲満開まであと少し

▲グループホームでのある日の夕食風景

▲ゆうかり保育園のおあつまり

NPO 法人 ENDEAVOR EVOLUTION

理事長
松浦　一樹

京都府

学生時代に社会福祉を専攻し、元京都府警の少年課刑事という異色のキャリアを持つ松浦一樹さんが設立し理事長を務めている。松浦さんは、事件で知的障がいのある青年を逮捕したことを契機に、人生で過ちがあってもやり直したい、ハンディを抱えていても頑張りたいという気持ちを持つ若者たちが、生活を共にしながら仕事を通じて成長できるよう、作業所を開きたいと思うようになり、周囲の反対を押し切り1999年に無認可の作業所に転職。その後 NPO 法人の認証を受け、現在就労支援 A 型事業所「ワークチャレンジスタイル GOKENDO」を運営している。伏見区に物流拠点をもつ株式会社五健堂とその関連企業と連携し、野菜加工やトレイの仕分け、ピッキング、配送ケースの洗浄など、スキルを伴う各種作業を担っている。この就労訓練を経て一般雇用につなげるが、途中でつまずいても、再び就労訓練に戻れるようにすることで離職率はゼロ。このステップアップ型就労支援により、全国平均のおよそ 2 倍の収入を達成、京都府のモデル事業とも言われ、真の福祉の実現に貢献。さらに親からの虐待などで家庭環境に大きな問題を抱えた若者たちが安心安全に暮らせるように、松浦さんは自宅マンションの隣の物件を 3 軒買い取り、グループホームを運営。親代わりとなって、生活面と仕事面の両方を支え、彼らの自立に向けて日々奔走している。

（推薦者：アロマテラピー クレア 安川　淳子）

このたびは社会貢献者表彰を頂きまして本当に有難うございました。ご尽力を賜りました各関係者の皆様には心から感謝し、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。

今から40年前の私が高校生の時に感じたこと、それは当時の排除の理念が強い社会、教育をこのまま続けていくと日本はいずれ必ずダメになってしまうということでした。そこで私は福祉・教育・心理学を学ぶために大学に進み、「失敗を許さない社会への挑戦」と題して、障害や課題があっても犯罪や引きこもりでつまずいたとしてもやり直しができる社会、頑張っている人が報われる社会を作りたいと勉強に励みました。大学卒業前に京都府警察を進路に選ぶきっかけになったのは、知人の紹介で知り合った少年課の刑事さんの存在でした。「こんな素晴らしい考え方の刑事さんがいるんだ！この方のような少年課の刑事になりたい！」という思いで警察官になりました。

その後、様々な出会いがあり、考えに考えた末の 8 年後、真の共生社会の実現を誓って刑事を辞職し、障害者福祉業界へ入ったのはバブルがはじけた後の世の中が大混乱の真っ只中でした。「力のある者が正義で、社会的弱者が排除される生きにくい社会を何とかしなければならない」と周囲の反対を押し切って己が信じた道を突き進んだのです。

そして失敗と経験を重ねて今から約17年前の平成19年に NPO 法人を設立。制約が多い組織に所属していては、自分がやらなければならないことは実現できないと悟った私はやはり最後は自分でやるしかないと独立することを決意したのです。

NPO 法人は障がい者自立支援法施行と共に設立しました。この時流れが私に向いてきていると強く感じました。多くの企業様との連携により独自のステップアップシステムを考案し、仕事を通して一緒に汗を流し、一緒に成長してきました。自立するためにはきちんとした仕事を確保し、工賃ではない、生活できるだけの給料を支払うことが大切だと思っています。また生活面の支援も欠かせません。しかし、昨今の新たな課題として多くの株式会社が福祉に参入したことで、福祉をビジネスとしてサービスを切り売りすることが福祉になってしまっている傾向があります。だから私たちは「福祉は誰のために、何のためにあるのか」をしっかり伝え、あらゆる手段を使って、血の通った福祉の大切さを訴え続け、必ず真の共生社会を実現していかなければならないと強く思っています。

▲グループホーム SAMURAI 集合写真

▲グループホームにて 自分たちで調理中

▲仕事中 スーパーの空箱整理作業中

▲警察官時代の松浦さん

▲毎朝 6 時50分作業場朝礼風景

▲癒しの女神福利厚生 アロマハンドケア

公益社団法人 沖縄県母子寡婦福祉連合会

会　長
与那嶺　清子

沖縄県

1972年に戦争未亡人を支援するための団体として那覇市に設立され、沖縄県唯一の女性相談の窓口として、ひとりで子育てする母親や寡婦から年間300もの相談を受けてきた。現在、同県の市町村にある29の福祉会支部を束ね、現在は母子・寡婦だけではなく、父子も支援の対象としている。戦後から続く母子寡婦支援の団体としては最も長い歴史を持つ。母子・父子家庭等が安定して子育てと就労の両立ができるように、受託事業の日常生活支援を行う傍ら、自主事業として高校生への給付型奨学金の支給や、県下の会員800～1,000人規模での大運動会、研修会等を開催し、子育てが終わっても10代から80代の家族の世代を超えたコミュニケーションをはかるイベントを種々開催している。就労支援では、講習会を開催。毎年約50人を就労に繋げているほか、所得向上に向けてスキルアップをサポート。支部それぞれの地域性と時代背景にマッチしたプログラムを実践している。

（推薦者：小川　訓久）

この度は、素晴らしい賞をいただきありがとうございます。

私どもは、1972年設立以降、一貫して母子寡婦支援を行っております。2013年には公益社団法人となり、法律の改正に伴い、現在は父子家庭も支援の対象としております。

沖縄県は子どもの貧困率が、全国の約２倍、母子世帯の出現率も全国の約２倍となっております。直近のひとり親世帯等を対象とした県の実態調査においても、物価高騰により生活が苦しいと訴える世帯が多く、さらに貯金はない、あるいは少額という世帯が多く、厳しい現状が浮き彫りとなっております。要因は様々ですが、27年間米軍統治下で、福祉分野の法整備等が遅れたことは、未だに沖縄に大きな影響を与えており、子どもの貧困問題等がなかなか改善されない一因ともなっております。

こうした中、ひとり親世帯をめぐる支援策は、拡充しており、私どもも県や市町村から事業を受託し、日々ひとり親世帯の経済的基盤を安定させるべく、支援に取り組んでいるところです。

また、受託事業以外にも、私どもは自主事業として、高校生への給付型奨学金の支給や、孤立を防ぐため、県下会員500～1,000人規模での大運動会、母と子のつどい等を開催し、経済的安定以外にも地域の中で安心して暮らせる社会づくりに尽力しております。

こうした取り組みは、私どもの下部組織となる県内市町村母子会の協力を得ながら、世代を超えて助け合いの仕組みを構築しているからこそ可能となり、設立より55年間、地道な活動を続けてきた賜物だと考えております。

今回の表彰では、長きに亘る活動を評価していただき、心より感謝申し上げます。

会員である県内市町村母子会の皆さんとこの喜びは分かち合いたいと存じます。今

後の活動の大きな励みとなります。

表彰式典に参加させていただき、他の多くの団体の皆様の素晴らしい活動にも感銘を受けました。それぞれ分野は異なれ、社会を少しでもよくしていくという理念は共通しており、力が湧いてきました。貴重な機会を与えていただきありがとうございます。

今後とも私どもの原点である、どの家庭に生まれても子どもたちが明るい未来を描くことができる社会の実現を目指し、地域福祉の充実を図るべく取り組んでまいりますので皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

▲大運動会の様子

▲第54回沖縄県母子寡婦福祉大会

▲就業支援講習会

▲リーダー研修会

▲奨学生認定式

▲母子部研修

一般社団法人 あまね

代表理事
大野　真如

佐賀県

障がいのある子どもを持つ親の共通した願いは「我が子より１日でも後に死にたい」。そんな親たちに寄り添うため、障がいのある子どもを生涯に渡る包括的支援を多機能型拠点で佐賀県小城市で行っている。胃ろう・透析・気管切開・吸引・酸素等、生涯にわたって医療ケアが必要な子どもの在宅サポート拠点、生活支援、急用や入院等の際、一時的に親が心と体を休めるレスパイト先がこれまで県内には無く、成人移行期の養育者からの不安の声があった。それらに応えるべく①親子に伴走できる在宅サポートを実施　②安心できるショートステイでの受入れ体制の確立　③子どもの終の棲家となる重度障がい者グループホームの運営。それらを、医師、看護師、保育士、児童指導員、機能訓練士、介護福祉士といった専門職も加わり、数々の支援を行っている。支援に必要な制度を、まずは行政に作ってもらう所から働きかけてきた。どんなに重い障がいがあっても、生まれてきた地域で、笑顔で最後まで暮らせる社会の実現を、活動の理念に掲げて、こんな支援があったらいいな、こんな風に安心できたらいいなに応えている。

（推薦者：公益財団法人 笹川保健財団 会長 喜多　悦子）

「医療的ケア児が地域で暮らし続けるために」

この度は、社会貢献者表彰式典において大変栄誉ある賞を賜り、厚く御礼申し上げます。また、推薦いただいた方々や選考委員の皆様に心より感謝いたします。

私は大学病院の手術部の看護師を経て、結婚し、お寺の嫁になりました。結婚後、16年前に得度し、僧侶としても活動しています。

僧侶になってすぐ障がい者の葬儀を務めることになりました。故人は県外の入所施設で亡くなられ、参列者は施設長と職員１名という、とても寂しい葬儀でした。

葬儀の後、住職から故人は元々お寺の近所に住んでおり、母親と二人暮らしだったと聞きました。母親が亡くなった後に身寄りがなくなり、県外の入所施設に入ることになったそうで、親亡き後、生まれてきた地域で最期まで暮らすことができない障がい者の現実を知りました。

しばらくして、私も妊娠しました。喜びも束の間、定期検診で「心臓が止まっている」と告げられました。悲しみに沈みながら、産婦人科医から「病気の子ども」を授かっていたかもしれないと告げられました。その時、入所施設で寂しく亡くなった方のことを思い出しました。これまでも障がい者との出会いはありましたが、あくまで他人事だったように思います。その時に初めて当事者としての意識を持ち、11年前に起業し、障害福祉事業を始めました。

それから、すべての事業で医療的ケア児者を受け入れ、成長に応じて、事業を拡大し続けてきました。ある母親の印象に残っている言葉があります。「この子より１日でも後に死にたい」子どもが先に死ぬことを願う母親がいるのです。親より後に子どもが亡くなるのが自然の摂理ですが、先に死んで欲しいと願わなければならないほど、

未来が不安であり、社会資源がまだまだ不足しています。

私は医療的ケア児者に関わる複数の事業を運営してみて、医療的ケア者の最期の住まいはどうしていけばよいだろうかと悩んでいます。様々な方法での看取りの場を想定して準備していく必要があり、また死後のグリーフケアや親亡き後の納骨の場等も考えていかねばなりません。

これからも、法人の理念であるどんなに重い障がいがあっても生まれてきた地域で最期まで暮らせる社会の実現に向けて、その時代の状況に応じた方法を模索しながら僧侶と看護師である立場から体制を整備し続けていきたいと考えています。

▲医療的ケア児者を受け入れ

▲あまねクリニック(小児科)診察

▲あまね体育祭

▲クリスマス会

▲多機能型拠点あまねくいっさい

▲日中活動支援拠点いーはとーぶ

森林塾青水

塾　長
北山　郁人

群馬県

「飲水思源（水を飲むときは、その源を思うべし）」を合言葉に、首都圏で環境保全ボランティアを行っている団体。2004年から群馬県みなかみ町上ノ原茅場で40年ぶりの「野焼」を復活させ、草原を守る活動を行っている。上ノ原茅場はかつて200haにもおよぶ草原あったが、開発により10ha程に激減した。その後、町有地を借り受けるなどで現在は21ha程に戻りつつある。地域と共に協力して茅場を再生し、草原として維持管理している。ここで刈り取られた茅は文化財を中心とした茅葺屋根の材料として使われており、３千束から多い時期は約６千束を出荷している。茅場だけでなく、入会慣行※１という先人の知恵に学び、日本型のコモンズ※２作りに挑戦している。また、生物多様性の保全のため希少生物の保護や環境学習、エコツーリズムなど毎月各種イベントを行っており、活動開始から20周年を迎えた今、上ノ原茅場を環境教育の場としても積極的に利用し、環境省の「自然共生サイト※３」への認定を目標に活動を続ける。

※１入会慣行：山野に地域住民が共同で立ち入り、材木の育成や採草の為に使用してきた林野のこと

※２コモンズ:地域住民にとって、必要な物を、地域住民で維持管理し、地域住民で利用するシステムとその対象となる空間

※３民間の取り組み等によって生物多様性の保全が図られている地域

（推薦者：日光茅ボッチの会 代表 飯村　孝文）

活動を始めて今年で20年という節目に、このような栄誉ある賞をいただき感謝しております。森林塾青水は、利根川の水源地である群馬県みなかみ町にある上ノ原という茅場（ススキ草原）を流域の都市住民、地域住民、行政と連携し保全活動を行っております。かつての日本の里山は、主に薪炭林としての雑木林と草をとるための茅場（ススキ草原）がセットで存在していました。このススキ草原の明るく開放感のある風景は、古来より日本人の心の原風景としてDNAに刻まれており、万葉集にもススキを読んだ句が多く残っています。また、童謡のふるさとの歌詞にある「うさぎ追いし　かの山」もススキ草原の情景を歌っています。しかし、戦後のエネルギー革命により、田畑を耕す牛馬からトラクターになり、草の堆肥から化学肥料に代わり、茅葺屋もトタンの屋根に変わってしまいました。そのためススキ草原の必要性がなくなり、国の拡大造林の政策もあり、ススキ草原のほぼすべては、スギやヒノキの人工林へと変わってしまいました。

しかし、明るいススキ草原にしか生息できない動植物もたくさんおり、その数も急激に失われていきました。近年、世界中で生物の多様性が急速に失われており、その損失を食い止めるための取り組みが、世界の共通の目標としてネイチャーポジティブと呼ばれています。我々が活動を始めた20年前には、このような世界になるとは想像もしていませんでしたが、それだけ地球の環境が悪化していることの裏返しでもあるといえます。

我々の管理する上ノ原のススキ草原は、わずか10haの小さな点ではありますが、絶滅危惧種も多く生息しています。また、関東一円の文化財の屋根材としてもススキを供給しており、文化庁が指定する文化財の森にも認定されています。これからも、生物の多様性の保全や日本文化の継承に寄与できるよう活動を続けて行ければと思っています。

上ノ原の茅場は誰でも訪れることができますので、ぜひ日本の原風景を見に来ていただければと思います。また、我々と一緒に活動してもらえる仲間も募集中です。春の野焼きに始まり、山菜採り、防火帯の刈払い、間伐作業、茅刈りなど通年、だれでも参加できる活動も定期的に開催しておりますので、お気軽にお問い合わせください。

▲野焼き

▲野焼き後の末黒野（すぐろの）

▲防火帯の刈払い作業

▲茅刈り検定の講習会の様子

▲古老の茅ボッチ

▲上ノ原の茅ボッチ

NGO スリヤールワ スリランカ

代　表
服部　和子

愛知県／スリランカ

「いつか子どもたちに教育の機会を、貧困から脱却するには教育しかない」服部和子さんは、1982年にはじめての海外旅行で訪れたマレーシアで、子どもたちが学校にも行かず物売りをしている光景に衝撃を受けた。国際交流活動を続ける中、1996年にUNCRDから開発途上国派遣員としてスリランカを訪問し、サンフランシスコ講和会議（1951）で対日賠償請求権を放棄する演説を行った、J.R　ジャヤワルダナ元大統領（当時財務大臣）に面会の機会を得た際　“I am very happy to meet many wonderful Japanese people in my life.”と、スリランカに対する取り組み、想いに大変喜ばれた。現地から「子どもたちが野球をやりたくても用具がない」と聞き、帰国後直ちにスリヤールワ　スリランカを設立し、中古の野球用具を集め、畳み２畳分の木箱で送った。翌1997年にはスラムエジアに職業訓練所を開所。1998年には日本企業の協力を得て、工業用を含め400台以上のミシンを寄贈し、農村女性の自立のための職業訓練所を建設、運営。その後、2004年に起きたスマトラ沖地震による津波で甚大な被害を被ったスラムエリアに、支援物資を送るとともに、親が安心して働ける環境をと、翌年には日本のボランティア貯金を活用して託児所を建設。３、４歳児の幼児教育をスタートさせた。貧困家庭の子どもからは授業料（月額日本円で500円）を免除している。国内では講演をはじめ、各種イベントに参加して、スリランカの現状を伝え、理解を得るように努めている。

（推薦者：NGO スリヤールワ スリランカ 事務局長 服部　義道）

みなさまの温かいご協力のお蔭で「人生最大のご褒美」をいただけたことに深く感謝申し上げます。

1996年UNCRDから開発途上国派遣員としてスリランカを訪問。三都市の市長、NGOとの懇談会、スラムエリアの視察。この時、現地から「野球をやりたくても野球用具がない」と支援要請。子どもたちの夢を叶えるため、帰国後直ちに「NGO スリヤールワ　スリランカ」を設立。

1998年「女性の自立のための職業訓練所」は足踏み式ミシン、その後は本格的に工業用ミシンを導入。ローカルマーケットからの受注は訓練生たちの家族、唯一の現金収入に結び付いた。

2004年12月26日に起きたスマトラ沖地震津波。スラムエリアに住む約400人が避難したお寺に、トラックを含む車４台。荷台には「Sri Yaluva Sri Lanka Japan」の横断幕。職業訓練所の訓練生が作った下着や衣類に加えて、米、紅茶、砂糖、歯磨きセット等、袋に詰めてひとりひとりに手渡し。「日本からのお金であってもスリランカの人を直接助けることを誇りに思う」と話す訓練生。１月現地入り。「face to face」顔の見える支援をみな待っていた。津波被災者支援のあと、復興支援として親が安心して働けるようにと託児所を建設。子どもたちのため、スリランカの未来のために３、４歳児の幼児教育をスタートさせた。食べるものを食べ、自分の人生は自分で選択で

きるように、貧困から脱却するには教育が重要だと、開発途上国訪問の都度、感じてきたことだ。

子どもたちの笑顔に癒されつつ、自立運営を目指してきたが、コロナ禍、経済危機が、それを難しくした。日本、スリランカ双方の努力だけでは、乗り越えられない経済的大きな壁が立ちはだかる。ボランティアにかかわったおかげで、多くの貴重な体験を積み重ねることが出来、いつしか私の「ライフワーク」となり、充実した日々に感謝。スリランカから心が離れることはない。

今後の展望は、前名古屋市長の河村たかし氏から「スリランカとの友好提案書」を書いてくださいとのアドバイスもあり、スリランカの託児所（幼稚園）と名古屋の大学に付属する幼稚園の先生との交流の機会を作りたい。また、30年近く続いた内戦のなかから生まれた世界平和を願っての美しい曲「ロエ　サマ」をみなさんと踊りたい。

▲日本語の指導

▲「サンフランシスコ講和会議」のスピーチで日本を救って下さったスリランカ元大統領　J.R.Jayewardene 氏と

▲会創立20周年「講演」と民族舞踊を披露愛知県国際交流協会「アイリスルーム」

▲食糧支援（米とドライフード）の前で皆で記念撮影

▲世界平和を願って「ロエ サマ」を踊る。卒園式で

▲先生に英語教材をプレゼント